

〈世界単位〉の考え方

高谷好一*

キーワード 〈世界単位〉, 地域間研究, 文明, 超近代, 生態

私は最近〈世界単位〉という概念を提唱している。これは超近代の世界を考えようとする時、不可欠の概念である。本論文ではこの概念を私自身がどのようにして作りあげてきたのかを記し、さらにそれに対してどのような批判があったのかを記してみたい。そうすることによって、この概念はよりよく理解してもらえるとと思うからである。最後に、〈世界単位〉という個別世界への帰還こそ、人類の内部崩壊を防ぐ唯一の方法であるということも付言したい。

I. 〈世界単位〉とは何か？

〈世界単位〉とは現在の国家に代わる新しい地域単位であると考えておいてよい。現存する国家というのは、日本などを見ているとそれほど具合が悪いとは思えないが、世界的に見渡してみると、いろいろの問題を抱えている。問題があったから、ソ連という国家はあのように消滅してしまったのである。ソ連は本来民族単位でもっと小さい集団を作っていればよかったのである。それが結局は持ちこたえられずに分裂してしまった。アフリカあたりにも事実上、全く機能していない国家が多い。ここでは、いろいろな歴史的・文化的背景を持つ人達がいるのだが、それを完全に無視して、列強が植民地に分割してしまい、それが後に国家として独立するようになったからこんなことが起こっているのである。こういう不合理な地域単位は早晩つぶれねばならない。その後にも理想的な地域単位を考えるとしたらどんなものが考えられるのか。その理想的な地域単位、それがここでいう〈世界単位〉である。

もし本当に意味のある地域単位を求めるとしたら、それは、そこでは人々が価値観を共有しているような範囲ということになるのだろう。あるいは、そこに人々が帰属意識を持つような範囲といってもよい。こういう範囲を見つけだして、それを〈世界単位〉と呼ぼうというのが私の考えである。

* 滋賀県立大学教授

れらが地球を救う知恵を持ち合わせている可能性が絶大であるのだから、一度それらを点検してみるべきであるというのである。

私も後者の考え方である。この考え方に従うと、まず最初にやらねばならないことは、そのいろいろの考え方をはっきりと形のあるものにして示し、できれば、地球上におけるその分布図を作ってみることである。〈世界単位〉という発想は、こういう意図のもとに考え出したものである。

地球規模の問題群が噴出している今、私達は、ぐずぐずしている訳にはいかない。地球が本当にダメになってしまう前にこの作業を完成し、何とか新しい秩序を考え出さねばならない。もう一度、人々が健康に、力強く歩み直せるように、この地球上の組織を組みかえなければならないのである。

III. 試行錯誤

私事になるが、〈世界単位〉というものを考えるまでに私自身が行ってきた試行錯誤の経過を簡単に述べさせていたたこう。戦後の日本の地域研究者の辿った道筋がある程度わかっているだけで、地域研究そのものの理解にも役立つのではないかと思うからである。

私は1966年に京都大学東南アジア研究センターの研究に参画し、その年からタイ国に調査に出してもらった。私の専門は第四紀地質学というものであったから、その研究をした。チャオプラヤ川ぞいの川岸の地層の記載をやりまくったのである。当時の地域研究は、多少の差はあったが、つまるところ、外国にフィールドを求め自分の専門分野の資料を集めるということであった。幸い当時の私は付き合いの良い方であったから、席を貸してもらっていたチュラロンコン大学地質学教室の若い先生や学生に多くの友人を得、よく一緒に調査をした。この調査は66年から70年にかけて断続的に行った。

ところで、そのうちに何となく雰囲気は怪しくなってきた。私自身はそういうことを面と向かって言われたことはなかったのだが、遠くの方では、「日本人の academism imperialism」というふうなことが囁かれるようになった。私はこのことを大変気にするようになった。「そうだ、俺はこの他人様の、まっさらのフィールドで濡れ手に粟式にデータを集めまくっている」、そう思うと強く良心の呵責に悩まされたのである。

1970年、私は当時の東南アジア研究センター所長だった市村真一先生のはからいでテキサス大学に留学させてもらった。テキサス大学は、第四紀地質学の分野では当時、世界ナンバー・ワンの大学だった。私はそこで私と同じ年恰好の4人の若い先生方に出会い、彼らによく調査につれて行ってもらった。彼らは4人で1台の小型機とモーターボートを持っていて、それで最新式の調査をやっていたのである。メキシコ湾岸が調査地だったが、そこを飛び、精査地を決めると着陸して、ボートに乗りかえ、現場に向かい、ボーリングを行った。そして、採取したコアを実験室に持ち帰って、いろいろの分析や試験をしたのである。それは、本当に金に糸目をつけない完璧な研究であった。

この連中と3か月も付きあう間に、私はつくづくと考えさせられた。まともに競争していた

んじゃ俺はこの連中には太刀打ちできない。私の研究テーマは彼らのそれに極めて近かったのだが、私の方はといえばサンダル履きで川岸を歩きまわるばかりであった。何か新戦法を考えださなければ、この連中には勝てない。それで私はテキサス滞在を予定より早く切りあげ、世界漫遊に切りかえた。何か穴場はないかと探索旅行に切りかえたのである。約8か月の世界周遊の結果、私は稲作が穴場であると目ぼしをつけた。思い切り泥臭く、ぬかみその臭いのような稲作研究をやってやろう。このテーマでなら世界のトップに躍り出られるはずである。世界漫遊を終えると、私は固く心に決め、第四紀地質学の方はきっぱりと諦めてしまった。

稲作だと決めると、私はその立地や耕作技術、それに農民の考え方などにも気を配るようにした。時には広域に歩きまわって比較をし、時には一箇所に長くとどまって文化人類学者もどきの調査をした。この頃はもう東南アジア研究センターに入所して5、6年経っていたから、地域研究ということがかなり気にかかっていた。そして、私は自分のやっている稲作研究のような学際的調査こそ地域研究だと、いささかの自負を持ちかけていた。

しかし、やがて私は再び不安になってきた。自分のやっているものは結局は応用地質学や文化人類学の亜流ではないのか？ そんな思いが頭をもたげてきたのである。そして、そのうちこれが大きな悩みになってきた。

ちょうどこの頃、こんな私に極めて大きな影響を与えてくれたのが同僚の矢野暢さんだった。矢野さんは地域研究は単なる学問であってはならない、道義性のあるものでなければならない、といった。私には最初、同氏のいう意味がわからなかった。しかし、ある日、急に全てが判ったように思えた。そうだ！ 未来に目を向けてみよう。過去を調べ、現在を記録するだけでなく、そこから未来のあるべき姿を考えてみよう。それが既存の学問から抜け出す道だ！ 矢野さんに刺激されて、私はこう考えついたのである。これは何でもないことのようにだが、私にとっては大変なことだった。私は眼から鱗が落ちるような気さえした。そして、気分は一気に晴れるのだった。その頃、当の矢野さんは「生態学よ、未来の司祭たれ！」などというふうなことも言っていた。これも今から思うと意味深い言葉である。

IV. 〈世界単位〉で行こう

稲作を中心に各地を歩いていた私は農村風景や農民の考え方が、地方によってずいぶんと違うことに気がついていった。例えば、日本、タイ、スマトラと並べてみると全く違う。次の通りである。

日本の水田。これは細心の注意をこめて、箱庭的に仕立てられている。どの田もしっかりとした畦で囲まれ、そこには灌漑水路からの水が入られ、稲は整然とゴバン目状に植えられている。こうして、水田風景には極相にまで達した人工美がある。それに農民がまた特別である。彼らは家に縛られ、村に縛られている。これらの田は先祖伝来の田だから、自分の代で他人の手に渡すなどということはどうていできない。また、ここは強固な村共同社会だから、勝手な行動は許されない。井立てや川掃除には必ず出なければならない。それをサボることは村八分になることである。村八分になったら、もうここでは生きて行けない。日本の農村はそういう

所なのである。

これに比べると、タイのデルタの農村は全く違う。第一、風景が違う。立木も何も全くないのっぺらぼうの稲田が何十キロメートルにもわたって広がっている。その中に直線の運河が掘られていて、家々はその上に一直線に伸びている。日本のような塊状の集落はない。だらだらと等間隔で連なっていくだけである。こういう所を見ていると、一体ここには村というものがあるのだろうか、という気になってくる。実際、社会学者達の調査結果でもムラなどというものはないということになっている。地縁的にまとまった、いわゆる自然村というのはないのである。あるのは政府が帳面の上で作らせた行政村だけである。ここはまた、雨季になると、とんでもない大洪水が起こり、全面を水没させる所である。だから、木目細かい稲作などというものとは全くできない。洪水が来る前に人々は荒起こしをし、そこに芻をバラ蒔いておくだけである。すると洪水がやって来、稲は勝手に発芽し、成長していく。いわゆる浮稲が作られるわけである。日本の農民が汗を流し営々と箱庭的に作っているのに比べると、ここの稲作は全く粗放で、農民はいわばのんびんだらりとし、自然に対して受身一方である。こんな所だから共同作業を通じた村人との相互規制などということも全くない。

スマトラとなると、これはまた全く違う。結論から先にいうと、スマトラには本来農業はないのである。たしかにスマトラでも稲作を見ることはある。しかし、それはほんの気まぐれな稲作なのである。それはこういうことである。スマトラは熱帯多雨林地帯である。熱帯多雨林というのは、植物資源に恵まれ、ある意味では生活のしやすい所なのだが、病原菌の巣でもあるので危険極まりない所である。特に林内に入って定着などすると、すぐマラリアにやられてしまう。それで人々は海風の当たる汀線に住んで、そこから林産物採取や漁業、時に交易旅行に出たりするだけなのである。森を開いて農業をするなどということとはしない。こういう人達なのだが、米が儲かるということになると、時にほんの数年間だけマングローブの背後や川岸に近い斜面を開いて焼畑方式で稲を作ったりするのである。スマトラの稲作りというのは、こういう、いわば投機的、一時的なものなのである。だからそこには決して恒久的な水田があったり、専門的な稲作農民がいたりするわけではない。私はこういう稲作を「ギャンプラーの稲作」と呼んでいる（拙著『米をどう捉えるのか』1990、NHKブックス）。こういうことだから、スマトラの農業や農民というのは、また全く違うのである。

私はこういうことを調べていたのである。しかし、矢野さんに指摘されてからは、こういう個別な風景をもった農地が将来どういう展開を見せるのか、農民達はそれぞれに自分の将来についてどういうイメージをもっているのか、そんなふうなことにより大きな興味をもつようになったのである。

こんなふうに興味の焦点の変わってきた私は一つのことが気になり出してきた。それは、こうして世の中にはいろいろな生活世界というものがあるのだが、そうした個々の〈世界〉をどう呼んだらよいのだろうかということである。そこで私は矢野さんに聞いてみた。

「将来を見通した時にも一つのまとまりになるような地域、そのような地域単位をどう呼んだらよいのだろうか？」

すると、矢野さんは即座に答えた。

「Unit Worlds ではどうだろう。〈世界単位〉で行きましょう。」

こうして、〈世界単位〉という言葉が矢野さんに教えられて、それ以後私はこれを使うようになったのである。

V. 〈世界単位〉の3類型

そこに存在する風景や生業、その住民がもっている将来像といったことに着目してみる。そして、それらがある程度均質だと考えられる所、それを〈世界単位〉だとしてみた。こうして、私はいくつかの〈世界単位〉を括り出していった。それはある程度は成功したのだが、やがて問題が出てきた。そして、結局、〈世界単位〉にも3つの類型があると思うようになったのである。そのことを書いておこう。

実はこの問題を最初に強烈に思い知らされたのは、ペルシャ湾岸のバンドル・ブッシュフルのことであった。バンドル・ブッシュフルはイランの港町である。それまでは当然そこはペルシャ人の世界だと思っていた。ところが実際に行ってみて驚いた。アーリアン系のあのペルシャ人の顔はほとんどなくて、そのかわり、セム系のアラビア人やアフリカの黒人、それに東南アジア系の顔が極めて多かったのである。それまでは私は、この湾岸も含めて「ペルシャ世界」とでもいったものをすでに考えていた。しかし、実際こうして見てみると、全く違うのである。高原のペルシャ農民と、この海岸の混住集団とは全く違う。この2つを一緒にすることはとうていできない、と、そういうことになってしまったのである。

バンドル・ブッシュフルの印象は強烈であった。しかし、考えてみると全く同じようなことは他の地域でも見られた。例えば、シンガポールがそうである。この中国人の多い港町はそれをマレー人の多いマレー半島と一緒にすることはできない。ジャカルタも同じである。ジャカルタにはインドネシアのあらゆる島々から人々が集まり、さらには外国人も多い。この混住都市は、背後のスダ人居住地と一緒にすることはできない。むしろ、これはシンガポールと一緒にした方が自然なようにさえ考えられる。この両者はともに港町として多くの共通点を持っているからである。

それまで、私は〈世界単位〉ということでも面的な広がりをもつ陸地部だけを考えていた。だから、ちっぽけなシンガポールはマレー半島とくっつけて考えたかったし、ジャカルタはジャワ島にある一つの町、と考えていたのである。だが、よく考えてみると、これはあまりに陸地にとらわれすぎた考え方であるということがわかってきた。もっと虚心に似ている者同士を集めてみたら、全く違ったことになるのではないか。こんなことを考えるようになったのである。

こういうふうにならなくなったとき、私の目の前に現れたものは港連合というものであった。港はお互いに似ている。どこの港でも人々は開放的で、派手で、いささか刹那的などころもある。それに、第一、港の人たちは交易という仕事を通じて、お互いに連絡しあい、いわゆる港連合のようなものを作っている。単に似ているというだけではなく、機能的にも、これらは意味のある一つの世界を作っているのだ。そう思うようになり、それなら思いきって、この海の

上にある港連合そのものを独立した〈世界単位〉にしてみよう。そう考えるようになったのである。

それまでは一つの生態の上には一つの農業形態があり、それが社会の性格を決めているのだといった単純な見方をしていた。極端に言えば生態が農業というものを介して〈世界単位〉を決めているのだという見方をしていた。しかし、それは違う。それとは異質な原理でできた〈世界単位〉のある、ということを知ったのである。それはいつてみれば交易ネットワークによって作られている〈世界単位〉である。こう思いつくと、私としては生態一辺倒の考え方を改めざるをえないことになった。

似たような話だが、その後また私は考えを少し修正した。生態でも交易ネットワークでもない第3のものが、〈世界単位〉形成に極めて大きく利いているらしいことを発見したのである。それは中国を旅行中に発見した。

中国というのは巨大な国である。黄土地帯、草原、砂漠、森林などいろいろな生態があり、それに応じたいろいろの生業がある。その生き方も多岐にわたっている。それにもかかわらず、中国の人達は皆中国人だという意識をもっている。歴史的に見ても、2000年以上にわたって(断続的ではあるにしても)中国という国を続けてきている。こうして、ここには中華世界とでもいうべき〈世界単位〉があるのである。これは、単に一つの生態の上でできたものでもなければ交易網によって繋がれただけのものでもない。全く別の原理で作られている。これは一体どうして出来ているのだろうか。

この疑問に対する答えは、実は中国人の友人によって与えられた。その人は、「儒教が中国を作っている。毛沢東も天子だった」といつてくれた。これで私は一挙にその構造を理解させてもらった。ここでは、極めて強い、大きな思想が人々を縛りあげ、一つの〈世界単位〉を作りあげているのである。

考えてみると、インドがまた全く同じような構造をもっている。あの多様な地方差をもつ巨大なインドがまたインドという一つの塊を作り続けてきた。あれはヒンドゥー教という大思想があったからこそ可能になっていたのである。こういうふうに考えて、私は第3のカテゴリーとして、イデオロギーによってまとめられている〈世界単位〉があるのだということに気付かせられたのである。いわゆる大文明型の〈世界単位〉である。

今では私は次のように考えている。世界には多数の〈世界単位〉がある。しかし、それらは3つの類型に分けられるものだ、と。生態が強く利いている〈世界単位〉、(交易のような)ネットワーク型の〈世界単位〉、それに、巨大なイデオロギーによって縛られている大文明型の〈世界単位〉の3つの類があるという考え方である。私の〈世界単位〉論はこの時点でいささかの前進をしたのではないかと考えている。

VI. 世界認識を試みる

地域研究の狙いは対象にした地域の本質を把握することであるが、それと同時に、今ひとつの狙いは世界認識である。世界全体の構造はどうなっているのか？ その中で対象としている

地域はどのような位置を占めるのか？ そういうことを問題にするのである。可能ならば、地球全体を〈世界単位〉に分割しておきたい。そうすれば該当地域の性格も相対的にはっきりしてくるからである。

しかし、このことは実際には大変に手間をとる仕事である。何故なら、〈世界単位〉というのは「価値観を共有する範囲」ということだが、その価値観などというものはそう簡単には捉えられないからである。価値観などというものは文献に書いてあるわけではない。そうかといって、その土地を訪れて、「あなた達の価値観はどんなものですか？」と尋ねてみても、そんな問いに答えてくれる人などいない。価値観などというものは、その土地の言葉を修得して、そこに長く住んではじめて、或る日突然、「あっ！ これがこの人達の考え方か」といったふうにわかってくるものなのである。だから、これを調べるには大変な時間がかかる。ひとつの〈世界単位〉の価値観を調べるのにも何年もかかる。だから、地球上に何十、いや何百もあるかもしれない〈世界単位〉の価値観を調べるとなると、一人でやるのは時間的に不可能だということになるのである。

こういうときによく行われる方法は多人数による共同調査である。世界をいくつかに分けて、各研究者は割り当てられた地区を調査し、その後、調査結果を持ち寄って全体像を作りあげるという方法である。たしかにこういう方法もあり得る。しかし、私はこの方法はとらない。この方法は研究者にとって魅力の薄いものだからである。自分自身で世界像を感得してみる。私などはそこに研究の醍醐味を覚えるからである。

ともあれ、ここには大きなジレンマがある。一人でやりおおせるには時間が足りない。しかし、自分の目で世界全体を確認する醍醐味も味わいたい。こういうジレンマの中で私自身が採用した方法は生態史的手法の援用ということであった。

私がこういう生態史的手法を援用するに到ったのにはそれなりの理由があった。各地の価値観を探し歩いているうちに、私は、人々の価値観というのは結局は基本的な所でその生態に対応している、と確信するようになったからである。それは、第1類型の生態に支配された〈世界単位〉においてだけではない。ネットワーク型の〈世界単位〉においても、大文明型の〈世界単位〉においても、そのことはいいうる。例えば、ネットワーク型の〈世界単位〉である。これは、海という極めて特殊な生態に対応して出来たものである。海には住めない。だが、そこを通過して船を走らせることはできる。いや、むしろそれはやりやすい。こういう特殊な条件のためにここにはネットワークが出来ているのである。

大文明型の〈世界単位〉にしても同じである。そこには黄土地帯という大きな農業潜在力を持った巨大な可耕地があった。だからそこは早くから多くの人たちによって占拠され、大農地に作りかえられていった。こうして、巨大な人口が集中したのである。しかもそれが2000年以上も昔に起こって、それ以降、ずっと続いてきた。こういう所では、この巨大人口が生きのびていくために、それ自体の内部で組織維持のための何らかの思想が生まれざるをえない。そうならなければ、巨大人口の存続自体がありえない。こうして組織維持の知恵としての儒教が生まれたのである。インドにおいても事情は全く同じであった。ここではガンジス川ぞいの大沖

積平野が同じような生産基盤を提供し、そこに生まれた巨大人口をヒンドゥー教という思想が生かし続けたということである。

こうして、〈世界単位〉というのは、3つの類型とも、おしなべて、その基層においては生態に支配されている、と確信するようになったのである。

それで、世界全体の構造を知りたいと思っていた私は、こういうことがあるのなら、とりあえずは世界を生態ゾーンに分割してみて、それで一応の大構造を掴まえたうえで、〈世界単位〉への細分に入っていこう、というふうに考えるようになった。この時、私が生態として考えたものは、砂漠、草原、森、野、海の5種類である。このなかで野というものに対してだけは少し説明しておいた方がよい。これは、原植生としては混交林なのだが、2000年の昔に伐開され、広大な農地になった所である。中国とインドにはこれがあるとしている。

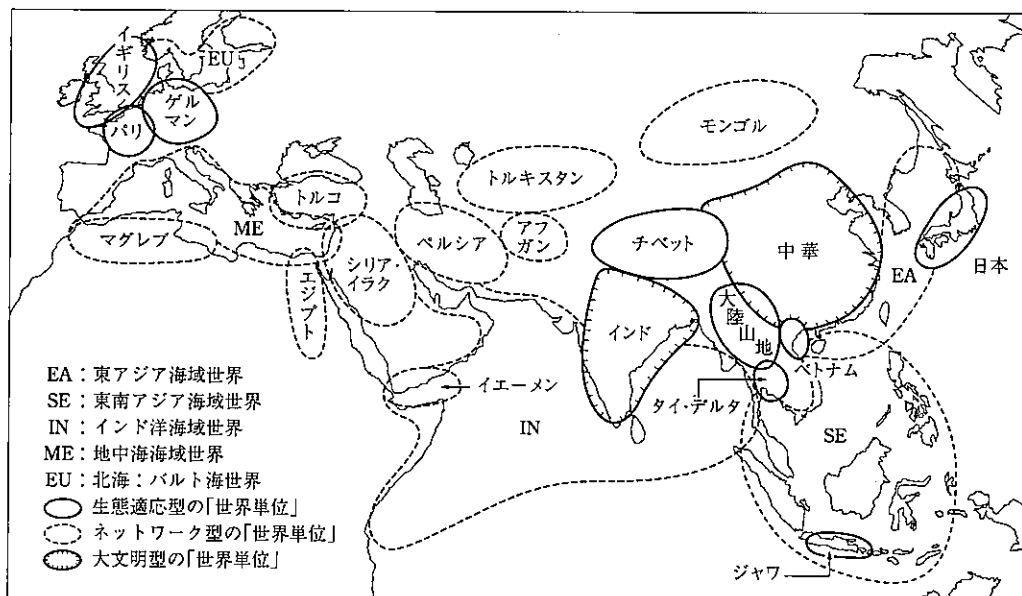
こういう生態系を考え、生態ゾーンを下絵にした上に、私の感ずる〈世界単位〉を示したのが下の図である。今のところでは各生態ゾーンの上には次のような〈世界単位〉が発達すると私は考えている。

森……生態適応型の〈世界単位〉

砂漠、草原、海……ネットワーク型の〈世界単位〉

野……大文明型の〈世界単位〉

この生態史を援用した方法は本来の意味での地域研究の方法とはだいぶ違う。まるで宇宙船から地球を遠望するようなどころがあり、少なくとも私自身が定義した「現地で価値観を探る」ことから始める地域研究とはだいぶ離れている。しかし、これも先に述べたような時間制約の故にいたしかたのないことである。問題を抱えながらもこの方法をとらざるをえない。地域研究は地域の固有性の把握と同時に、世界認識をもまた必要としているからである。



VII. 批判1：基準が不統一

以上は私が提唱してきた〈世界単位〉の概要であるが、ここで少し視点を変えて、この〈世界単位〉に対して、今までに出されている批判とそれに対する私の考え方を述べておきたい。

かなり初期に現れた批判としては、「地域に分割するときの基準に統一性がなく、科学的ではない」というものがあつた。

こういう批判の出る背景には、地球を植生で区分するとか、言語分布図を作るといったディシプリン中心の考え方があつたのである。こういう質問に対しての私の反論はこういうことであつた。そういう科学的といわれる方法は論文を作るのには便利かもしれないが地域の研究には役立たない、というものである。地域の本当に重要な特性、地域の魂というようなものは決していわゆる方法論の決まってしまう科学的分析では掴みえない。

ごくごく初期の頃、私はこういう実験をしてみた。テーブルの上に並べられた皿や茶碗やヤカン、醤油さし等々といったものを分類するのである。すると、例えばヤカンのような金属器が最初に目にとまる。そこで、これを一つの集団として別にした。すると、次には残つたものの中で色鮮やかな赤の食器に強く引かれた。そこで、これを次の一群とした。次には多くの小皿群が一群に見えてきた。それでこれを第3のグループとして選別した。こうして、次々にグループを作って行つたのである。もし、このようにするとすると、この際分類基準は何なのだろう。全く統一性はない。統一性はないのだが、その場で、金属が、赤色が、そして小型の陶片が、いかにも個性的に自分達を主張していたのは事実なのである。それで、それを私は選んだ。たしかに、選択基準に統一性はなく、非科学的な選択ということになるのだろう。だが、個性を、いのちを掴み出すというのはこういう方法でしかなしえないではないか。これが私の主張である。

〈世界単位〉分布図を見た人達の中には、またこんなことをいう人がいた。中国とジャワではサイズが違いすぎるではないか。もう少し、ほどほどのサイズに揃える方がよいのではないか。これも大変形式的な議論である。中国人は、中国に帰属意識を持っているのだからそれを一つの単位としなければ仕方がないではないか。ジャワ人がインドネシアよりもジャワにより強い帰属意識を持っているとしたら、今度はジャワを一つの単位としなければ仕方がないではないか。これが私の答えであつた。

分類の基準の不統一は、これこそ地域研究の一大特徴だと私は考えている。先入観なしに対象に近づいてみる。そして、先方が発信するいのちを探知して、それをもってその地域の最も重要な属性とする。そうすると、あるところでは祖先崇拜が一番大切なものとして出てくる。別のところでは金儲けが出てくる。実際、対象の発信するものは全くバラバラである。調査者にとってはどんなものが発信されてくるのかは最初は全くわからないのである。

VIII. 批判2：重層する帰属意識

上の問題よりもっと深刻な問題は帰属意識の重層性の問題である。批判意見は、次のようにいうのである。およそ人間というものは何層ものレベルに帰属意識を持っている。それを一つ

のレベルだけに限定してよいのか？ それに、採択したそのレベルは本当に最も重要なレベルなのか、というのである。

先に見た中国の場合でも実際には問題はおおいにあるのである。私は儒教で縛られた中華世界というものが最も重要なもので、人々はそれに最も強い帰属意識をもっているとした。しかし、批判者はそうではないのではないか、というのである。彼らは中国人である前に潮州人であり客家であるのではないのか、いやもっといえば宗族の一員ということをより強く感じているのではないか、というのである。さらにまた、中華世界などというものを考えているのはエリートだけで、一般の人たちはそんなことは全く考えていないのではないか、というのである。

たしかにそういうことは現実には存在している。だが、それを認めたくて、なおかつ私は儒教でまとめあげられた中華世界というものを主張しているのである。それは、世界を広く見渡してみても、こうした大思想によってまとめ上げられて〈世界単位〉が作られていると思わせられるような所は他所にはほとんどないからである。そういう気配があるということだけでも、これは極めて大きな特徴としなければならない。たしかに、今の中国の持っている中華世界性を真正面から取りあげて、その不完全さや、内部矛盾というものをほじくり出したら次から次へとボロが出てくる。現実の中華世界は理想的な中華世界とは程遠いのである。それはよくわかっている。しかし、それにもかかわらず、ここは中華世界性が議論の対象になる所である。そここのところを私は重視したいのである。

現実の中華世界の完璧度ということになると、例えばすでに触れたように、エリートと一般民は違うという議論も出てくる。これは当然出てきてよい議論である。私としては、そういうところをもっともっと掘り下げて議論して、はじめて本当の中華世界の理解はえられるものだと考えている。そういうことこそ地域研究者として今後やっていくべきことだと思っている。だが同時に大胆な仮説を提示してみることも、これまた大変必要なことではないかと思うのである。

ところで、こういうことを言い出したついでに、もっともっと深い所にある問題についても少し触れておこう。これは最近の私自身が大変悩んでいる問題である。

私は、全ての人たちは誇りうる自分たちの地域文化を持っていると主張し続けてきた。それがあからこそ帰属意識も出来るのであるといつてきた。地域研究はそれを探り出すことだ、とも主張してきた。それが多少危なくなってきたのである。

私事になるが一年半前、私は前の職場を離れて今の滋賀県立大学に移った。そして、いよいよ授業を始めようとした時、私は重大な発見をし愕然としたのである。私の持論に従うと、滋賀には近江文化というものがあ、滋賀の人たちは皆それに誇りを持っているということになるのである。私は県立大学へ行ったらそのことを教えようと考えていた。だが、いざとなると、そうはいかなくなったのである。京都から見ていた近江文化は素晴らしかった。だが、自分自身が実際、滋賀に住んでみると、本当の所がわからなくなってしまったのである。滋賀の現状は決して素晴らしいだけというようなものではない。嫌なことがいっぱいある。いいことと悪いことが表裏一体になっている。こうなってくると、単純に胸を張って、私は滋賀県人だから

滋賀県に誇りを持っている、とは決してよく言えなくなったのである。私は自信をなくした。

それまで長く離れていた故郷に帰って来て、そこに住んで、一年半経ってごく最近ようやくにして私にはほんの少しではあるが地域の誇りというものがどんなものかわかりかけてきた。同時に、帰属意識の実態というのにも手がかりが掴めかけたような気がする。だが、それもまだ本物かどうかかわからない。

今までわかったような顔をしてやってきた私だが、今頃になって地域研究を根本からやり直さねばならないような問題が、こうして今起こっているのである。

IX. 批判3：境界がだぶっている

図1に示したような私の〈世界単位〉分布図を見て、「境界がだぶっている、どこに本当の境界があるのだ？」という質問をされることがある。

これに対して私は、「これは国境などと違って一本の線でピシッと分けなくて良いのだ」と答えている。より正確にいうと、〈世界単位〉同士の間境界は、そこに関係している2つの〈世界単位〉がそれぞれにどういう性格のものであるかによって、いろいろの形と内容があるのだと考えている。

例えば、雲南に見る中華世界と東南アジア山地世界の間境を見てみると次のような具合である。小縮尺の地図の上にこの2つの世界の境界線を引くと1本の線になり、それより北は中華世界、それより南は東南アジア山地世界と明瞭に分かれているかのように見える。だが大縮尺で見るとそうではない。両者の間にはいろいろな意味での漸移地帯が現れてくる。その漸移帯の一つの形態はこういうことである。同じ谷筋をとってみても、谷底だと中華世界のメンバーである漢族が水田を営んでいる。だが少し斜面を登って山腹に到ると大陸東南アジア山地世界のメンバーのハニ族が焼畑を営んでいる。ここでは2つの世界が高度によって分けられているのである。

またこんなこともある。上のハニ族の集落でも、部落長だの一部の人たちは漢文化の感化を受けて事実上の中華世界のメンバーのような働きをしていることがある。また、こうした集落に漢族の商人が入りこんでいることもある。こうして接触前線ではいろいろの混交形態が見られるのである。

私の経験したケースではこんなこともあった。中国の中央政府の政策が変わったということで、一気に少数民族が増えたのである。その時は、少数民族には大学入試の際の特別な恩典が与えられることになった。すると、両親のうちのどちらかが少数民族である息子や娘が大挙して少数民族に変わった。それまでは漢族と名乗っていたのである。周辺では帰属というものは極めて便宜的に決められるという事実があるのである。

ネットワーク型〈世界単位〉のような所ではこの帰属問題というのはもっと弾力的である。この型の世界では実利を重視して、体面などにはあまりこだわらない。これは大文明型の〈世界単位〉とはだいぶ違う点である。それで、大文明型の世界が強力になって、そのイデオロギ－を押しつけてくると、ネットワークの方はそれを簡単に受け入れる。この時には、一見、大

文明型世界の拡大が起こるわけである。だが、イデオロギーを押しつける力が弱くなってくると、ネットワークが拡大していく。接触面は実際にはこういう具合に歴史を通じて揺れ動いているのである。

〈世界単位〉の境界は歴史を通じて揺れ動いている。それに、それぞれの〈世界単位〉ごとにそれ独自の周辺のありようを持っている。境界の実態は、そのことを含めて個々の〈世界単位〉についてケース・バイ・ケースで考えていく必要があるのである。境界がだぶっているというのは単に作図が不正確だから、そうなっているのではない。そこでどういう接触現象が存在しているかを具体的に考える余地を残してある、ということである。

X. 批判4：関連性が見落とされている

私の提唱する〈世界単位〉はあまりにも生態に片寄りすぎていて静止的なものになっている、実際にはもっと社会的なもの、動的なものである、という批判が多くの人たちから出されている。これが第4番目の批判である。例えば、国際関係論の人たちは言う。東南アジアなどというものも、もともとそこにあったのではない。これはイギリスや後にはアメリカが軍事的配慮から考え出した、いわば一種の政治的産物であり、それが出発点となって今日の東南アジアが作られていったのである。だから、重要なことは生態的基盤というようなものではなく、外部との関連である、というのである。

これは、私にいわしむれば、あまりにも歴史を無視しすぎた見方である。また社会の多様性に目をつむりすぎている。地球を、その上には何の地理的偏差も歴史的しがらみもない均質な物理的理想体のごとく考えている。そして、関係論という物理学者顔負けの理論を打ちたてすぎている、ということになる。

この単純な関係論の良い例が、例えば、ベネディクト・アンダーソンの〈想像の共同体論〉である。アンダーソンはヨーロッパで起こった国民国家形成のメカニズムが、そのままオランダ領東インドに輸入されて、インドネシアという国民国家が作られたと論じている。多くの人達はこのアンダーソンの論文を地域研究のひとつの代表的業績のごとく持ちあげるのだが、私にいわしむればとんでもない話である。この考え方でいくと、同じ話はアフリカでもラテンアメリカでも太平洋の島々でも、どこにでも当てはまることになる。地域性というものを全く無視した議論なのである。

私達の間では、この固有性と関連性という問題は少し視点を変えて、内世界と外文明というふうにして議論してきた。それぞれの地域には固有の内世界というのがあって、そこに到来した外来の文明が重層していつ今日地域を作っていると考えるわけである。例えば、東南アジアだと、その内世界は熱帯多雨林多島海に広がる海民の世界である。そこにインド文明が到来し、イスラーム文明が重層し、最後にヨーロッパの植民地勢力の到来があって、今日の東南アジア世界が出来上がった、と考えるわけである。

ところで、この内世界であるが、それがいいのか無いか、というところで議論が分かれるのである。関連論者は、そんなものは無いのだという。あっても極めて小さな意味しか持たな

いから問題にしなくてよい、というのである。例えば、東南アジアの場合だと、欧米文化を剥がし、さらにその下のイスラーム文明を剥がしてしまつたらあとには何も残らない、という。ちょうどタマネギのようなもので、皮を剥いでいったらそこには何の核もない、というのである。一方、私たちの考え方はそうではない。数枚の外皮を剥がしていったら内世界という核が出てくる、という考え方である。いわゆるタマネギ論争があるのである。

東南アジアの場合、この問題は単に学者の間の議論で止まっているわけにはいかない今日的な大問題につながっているのである。今、東南アジアには ASEAN を中心としためざましい経済発展があるが、例えばそれへの対応に関して直接、ここの所が関係してくるからである。関連派の考え方では、この経済発展はアメリカや日本がひき起こしたということになる。東南アジアそのものには何らこの発展の基盤になるようなものはない、だから大事なのは日・米の経済力という外力だけということになるのである。これに対して、固有派の考え方は全く違う。これは内発的なもので、ASEAN 自体にこの発展をもたらす力があるということになるわけである。こうなってくると、ASEAN に対する私達日本人の態度も変わってこなければならぬ。

ASEAN はそれ自体が独自の力を持っているということに関して、固有派は次のような証拠をあげるのである。東南アジアの熱帯多雨林多島海はそれ自体が一つの独自の世界であり、実際、歴史を振り返ってみると、それ自体の力で何度か世界の最先端に躍り出てきた。例えば、8世紀から10世紀にかけてのスリビジャヤの時代がそうである。さらには15世紀から17世紀にかけての、いわゆる the age of commerce の時代がまたそれである。これらの時期、この海域は当時の世界情勢をうまく利用して、自らの海域性をフルに発揮し、歴史の表舞台に躍り出ていたのである。こうして、今日の ASEAN の興隆もまた地域自体が自らの力で招来した興隆であると見るのである。言ってみれば今日の興隆はこの地域が歴史の中で繰り返してきた第3ラウンドに当たる、というわけである。

ASEAN をどう解釈するかは、今の日本にとっては極めて重大な問題である。固有性と関連性という問題はこのように、今日的な問題にも直接かかわっているのである。

XI. 〈世界単位〉と現代社会

固有性か関連性かという問題は単に ASEAN の解釈にかかわる点に止まるものではなく、もっと深い所で考えられねばならない問題である。世紀末的現状を思うとき、私はそういわざるをえないのである。

考えてみると、近代というのは、人々が大地からも共同社会からも離れてバラバラに生きることが奨励された時代であった。個の確立だの、個人の尊厳だのということが喧伝され、その結果、人々はそれまでの伝統の束縛から物理的にも精神的にも解放され、自由に動きまわることになった。人々はこの自由を謳歌した。しかし、まさにこの自由そのものが曲者であった。この自由の故に、本論の冒頭で述べた地球規模の問題群が噴出してきたのである。環境破壊や南北格差といった即物的な弊害だけではない。もっと深く、人間一人一人が、まさに多すぎる

自由の故に自分自身を見失い、心の病に陥ったのである。オウム事件などはその典型例であった。

私は最近、地域研究のシンポジウムで川喜多二郎先生にお会いし、先生に「麻原彰晃をどうお考えになりますか？」と聞いてみた。先生は「僕は陰惨なところがイヤだね」とだけおっしゃって、「僕の息子が最近本を書いたのだが、見てくれるかね」とおっしゃった。そして、翌朝、早速その本が届けられた。川喜多八潮著『脱「虚体」論』（日本エディタースクール出版部、1996年）であった。

私はそれを読んで、いたく感心した。こんなことを考えていてくれる人がいるのか、こんな人にこそぜひ地域研究をしてもらいたい、とそう思ったのである。以下は同書の「あとがき」からの抜粋である。

オウムの若者たちを、山師にダマされた、精神界や社会への考察に疎い“無知な秀才”とみなす、おめでたい評論家たちがいるかとおもえば、西欧近代的な自我に根ざした「個人主義」や「合理主義」的社会観がきちんと確立されていないために、神秘主義や共同幻想に簡単に絡めとられてしまうなどという、笑止千万なことをいう知識人たちがいる。

こういう人たちは、人間が非合理的なもの、共同的なるものに吸引されるということが、どういう魂の深層の暗部から出てくるものであるか、そして、そういう吸引に抗して己れの〈個〉を真に確立することが、どれほどの巨大な力わざを要するものであるか、について、ただの一度も、真剣に苦しんだことのない者たちなのだ。(同書234頁)

八潮氏のいうことは本当なのである。「己の〈個〉を真に確立する」ということは本当に大変なのである。だから、共同体が必要であり、大地が必要なのである。このことに関しては、私は自分の体験からもそういわざるをえない。そして、最近の世相を見ていると、ますますこのことを強調せざるをえないのである。

あの頃、私はいわゆる実存哲学というものとりこになっていて、夢遊病者のような生活をしていて、友人達から離れ、故郷からも逃れ一人になって、ある時はナルシストになり、ある時は悪魔的になって、観念の世界に生きていた。観念だけの世界というのは実に危険なものである。あの時の私なら、どんな悪魔的な犯罪でも起こしうる状況にあった。例えば、恋人の肉をむさぼり食うということも可能であった。医者はあの時の私を精神病患者と呼ぶかもしれない。しかし、それは間違っている。私は完全に論理的に考えていた。純粹に論理的に考えたが故にああなっていたのである。

40数年前のあの頃は、こうした大地離れの生活はまだ例外的な存在であった。だが、その後は事情がだいぶ変わってきている。組織的な洗脳が行われたからである。封建的伝統はいけなさいだの、新しい時代が来ているのだから旧習にはとらわれるな、といった教育が徹底的に行われた。あの頃から世の中は急激に変わっていった。多くの人達が普遍が存続すると教えるマインド・コントロールを受け、近代という虚構の中に駆り立てられていった。

その後また何十年かたって、科学・技術は長足の進歩をとげ、虚構はもっと広域に大規模に広がっている。そして、今ではもうそれに抗し難いほどである。例えば、最近の私達は皆、車でスッ飛ばして行く。窓を閉めきった車で、春風にも夏風にも当たらず、まわりの景色さえ見ないで、工場やオフィスにスッ飛ばして行く。帰宅すると今度はテレビでヴァーチャル・リアリティの虚像を体験させられる。

私達は今や、大地というものに足を置く機会をほとんど完全に失ってしまっている。共同体の仲間と争い、怒り、しかしそれがあるが故に自分を確認し、縛りつけるという、そういう仕組みもほとんど失ってしまっている。あるのは、立つべき足場もなく、語りかけるべき相手もない、合理主義と個人主義という、恐ろしく孤独で危険なからくりだけである。こういう中で、全てから切り離された個人がそれぞれ、ばらばらに考え始めている。これを続けたらどうということになるのか。彼や彼女がとてつもない考えを生む可能性が大きい。そして、その考えで生きていく。その結果は、とんでもない結果を生むようなことにもなる。こうなった時、たとえそれが犯罪的なものであったとしても、誰もそれを責めることはできない。何故ならば、彼の行動は現代が作りあげた仕組みにあったものだし、彼自身のなかでも論理的には全く非の打ちどころのないものだからである。

こういう現代の流れのなかに地域研究も置かれている。そして、ここにはすでに見たように2つの流派があるのである。ひとつは、故地を軽視し故地の縛りを軽視し、関連という汎世界的現象だけを重視する学派と、今ひとつは、あくまで故地にこだわろうとする学派である。地域研究というのが明日の世界の秩序を考えるものであるとしたら、そして、さらにいえば人類の生存そのものを考えるものであるとしたら、このあたりの所はよくよく考えてかからねばならない、と私は思う。私のいう〈世界単位〉にはそういう意図もこめられているのである。